

槍に使われた人骨とその虚像性 : ビスマーク諸島の資料の分析を中心として

著者	野林 厚志
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	10
ページ	109-115
発行年	1999-03-26
URL	http://doi.org/10.15021/00002260

槍に使われた人骨とその虚像性 —ビスマーク諸島の資料の分析を中心として—

野 林 厚 志

(国立民族学博物館)

1. はじめに

ジョージ・ブラウンコレクションの中でその件数が最も多いものは戦争に関わる道具とされているものであろう。これについては、本論文集のなかでも関根がソロモン諸島関係資料を例にとり、その大半が「戦闘の文脈」に貫かれているものであると述べている(関根1999)。ソロモン諸島だけでなく他地域の資料に関しても、戦争もしくは戦闘行為に実際にもしくは儀礼的に用いられたものは多い。とりわけ、ブラウンによる布教活動が白人との本格的な接触となったビスマーク諸島の集団に関する資料については、伝統的文脈のなかに位置づけられた「戦争」もしくは「戦闘」に関連した資料が豊富に残されている。

ブラウンが収集した資料のうち、ビスマーク諸島関係のものに限定した場合、武器として記載されているものには、槍、盾、刀剣、投石器(石も含む)、棍棒、短剣などがあげられる。コレクション中、群をぬいてその件数が多いのは槍である。ビスマーク諸島の資料として記載されている槍は192件あり、そのうち、19件はニューブリテン島のもので、残りについては島の名前までは記録されていない。本稿では比較的まとまった件数が残されているビスマーク諸島の槍について基本的な記述を行なったうえで、資料から読み取れる戦いの文脈について若干の考察を加えることにする。

2. 槍の形態

槍の形態にはその材質、装飾の有無、装着されているもの、先端部の形状などに違いがみられる。そこで、これらの基準によって形態の分類をおこなったところ、表1のように大別することができた。これらの形態と槍の長さとの関係を示したのが図1である。グラフから見る限り、それぞれの槍のタイプと長さとの間に相関関係を見出すことはできない。全体の傾向として言えるのは2~3mの槍の頻度が高いということ

表1 槍の形態分類

槍のタイプ	形態上の特徴
A	木製・裝飾有・骨の石突
B	木製・裝飾無・骨の石突
C	木製・裝飾無・木の骨様石突
D	木製・裝飾無・先端に返し
E	木製・裝飾有・先端に返し
F	木製・裝飾有・先端に返し・骨の石突
G	木製・裝飾無・先端に齒製の返し
H	木製・裝飾無・先端に黒曜石装着
I	竹製・裝飾無・先端に黒曜石装着
J	竹製・裝飾無・木製の先端
K	竹製・裝飾有・木製の先端
L	竹製・裝飾無・木製の先端・先端に返し
M	木製・裝飾無
N	木製・裝飾有
O	竹製・裝飾有
P	木製・バドル型
Q	木製・先端が二股以上

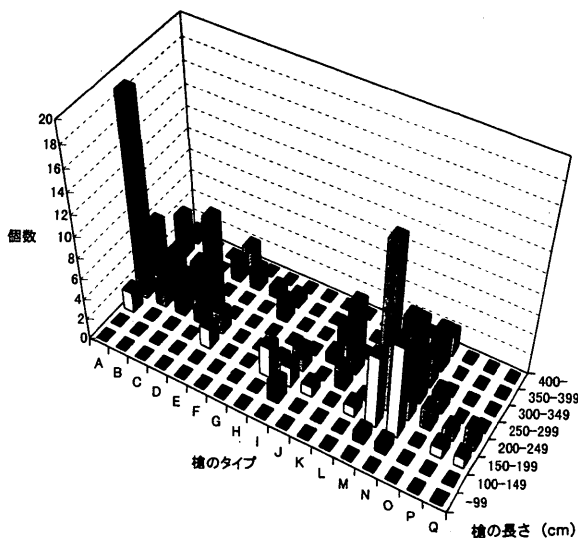


図1 槍のタイプと長さとの関係

である。

民族誌的記述との関連で興味深いのが、石突に用いられた骨である。ブラウンの記述によれば、これらの石突には人間の足や腕の骨が用いられていたとされているが、実際、石突に使用されていた骨を観察したところ、4種類の異なる骨が用いられていた。これらの骨製の石突の共通した特徴は、長さが30cm前後に加工されていること、一方の端に槍に装着するための穴が穿ってあることである。これらの資料を現生標本と比較したところ、人間の大腿骨及び脛骨、大型鳥類の脛骨、カンガルーの中足骨であると現在のところ同定できている¹⁾。以下にその詳細について記述していく。

■人間・大腿骨 (例：標本番号 H136909、図2 参照)

近位端は大転子、小転子、大腿骨頭が欠損している。大腿骨頸の一部は残存しており、転子間稜の部分には赤い塗料が塗布されている。遠位端も顆間線よりもやや上方から下が欠損しており内側上顆、外側上顆ともに垂直方向に切り落とされた状態になっている。切り取られた遠位端の表面には、直径16mmの穴が開けられ、槍の柄に装着されていた。これらの欠損形態は大腿骨を用いたいずれの場合でもほぼ同じであることから、使用時や搬送時における破損ではなく、あらかじめ定型的に加工されていたと考えてよい。表面が比較的滑らかであることや栄養孔開口部が細長い形状をして

いることから表面に関して削りの加工がほどこされていたことがわかる。骨体の中央部よりもやや上方の内側にはカットマークが観察された。

■人間・脛骨（例：標本番号H136994、図3参照）

近位端の関節部が欠損しており、遠位端は内果関節面がほぼ保存されていた。大腿骨とは逆に近位端の表面に最大径20mmの穴が開けられ槍に装着され、装着部の周囲に朱色の塗料が塗布されているのが観察された。骨幹の表面は、大腿骨同様に削られ、滑らかな状態であった。

■脛骨・鳥類（例：標本番号H136949、図4参照）

遠位端関節部における特徴的な滑車や骨組織が緻密であると同時に非常に薄いことから鳥類の骨の特徴を備えていた。ピスマーク諸島及びその周辺地域における動物相を考慮した場合、走鳥である可能性が強く、エミュー（大阪市立自然史博物館蔵）の現生標本と比較したところ、大型の走鳥類の脛骨と同定することができた。

近位端の関節部は欠損しており骨幹に垂直に切り取られている。切り取った部分の表面には朱色の塗料が塗布され、直径15mmの穴が開けられて槍に装着されていた。遠位端の保存は良好であり、表面が部分的に削られているのを除けば、滑車部分はほぼ完全に保存されていた。

■中足骨・カンガルー類（例：標本番号H136937、図5参照）

一端は関節部分が欠損しており、他方は骨幹に対して斜めにはいる関節面がひとつだけ発達していることから、複数の骨との関節形成はないと考えられた。骨幹部の断

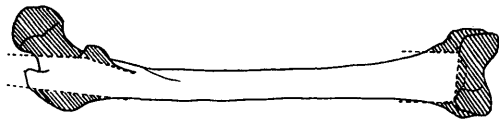


図2 槍に装着された人間の大腿骨

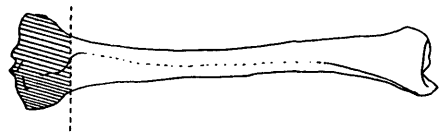


図3 槍に装着された人間の脛骨

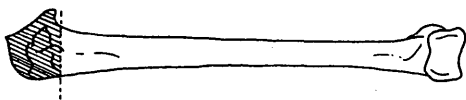


図4 槍に装着された大型走鳥類の脛骨

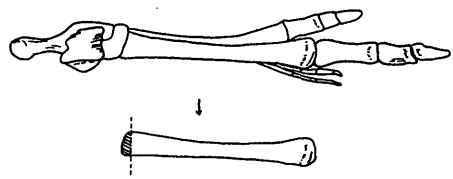


図5 槍に装着されたカンガルー類の脛骨

面は扁平に近く、大きさから判断した場合、中足骨である可能性が強く、カンガルー（大阪市立自然史博物館蔵）の現生標本と比較したところ、同属の大型動物の中足骨（第4指）であると同定した。欠損していたのは近位端であり、最大径16mmの穴が開けられ、槍に装着されていた、塗料の塗布は観察されなかった。

人間はともかくとして、ヒクイドリもしくはそれに匹敵するような大型の走鳥やカンガルーなどがビスマーク諸島に生息していたかどうかは確認すべき問題点であろう。ブラウンの記述によれば、当時のニューブリテン島の動物相はオーストラリア北部のものによく似ており、ワラビーやクスクスといった有袋類が生息していたようである（Brown, 1978 (1908) : 100）。したがって、当時、ワラビーよりも大型のカンガルー科の動物が生息していた可能性は十分あったと考えてよいであろう。鳥類についてもオーストラリアと東南アジアの要素をあわせもった、いわゆるニューギニア的なアビファウナであることが指摘されており、ヒクイドリやエミューといった大型の走鳥の利用は十分可能であったようである（Brown, 1978 (1908) : 100）。したがって、ニューブリテン島を含めたビスマーク諸島におけるこれらの動物骨の利用は、交易などによる入手は特に要せず、比較的容易に行なうことができたと考えてよいであろう。これらの骨はほぼ同じサイズに加工されているが、石突として採用されるためには、槍に装着できるような断面積とある程度の長さが必要であり、これに該当する部位として主に下肢の長管骨が用いられていたと考えられる。

3. 戦闘の文脈のなかで語られた物質文化

コレクション中の武器が人間の実際の殺戮のために使用されたのか否かは別としても、これらが常に「戦闘の文脈」の中で機能していたことは事実であろう。それが実際の戦闘行為ではなく、儀礼的な戦闘行為であったとしてもである。では、戦争もしくは戦闘行為とは彼らにとって一体どういう意味を持っていたのだろうか。

オーストロネシア語族の言語を母語にもついわゆるオーストロネシア系の諸集団は首狩りをふくめた戦闘行為を行ってきたことで知られているが、筆者が研究の対象としてきた台湾の先住民族（台湾原住民族）もその例にもれない。台湾原住民族の戦闘行為において最も重視されたのが首狩りであった。台湾総督府が理蕃課警察官向けに発行した月刊誌である「理蕃の友」は、創刊号において原住民族の首狩の慣習について取り上げており、首狩りという戦闘行為に対する統治する側の関心の高さをうか

がいいることができる。これによると、首狩りを行なう理由が次のように記されている（台湾総督府警務局理蕃課,1993（1932）：3）。

- 1 成年の資格を得るため
- 2 争議解決の手段として神の裁断を仰ぐため
- 3 近親の復讐または族長のかたきうちのため
- 4 結婚の準備または、妻の争奪の競争のため
- 5 悪疫やその他の不幸のできごとを祓うため
- 6 武勇を誇り、尊敬の念をえるため

ここで注意しなければならないのは、自分と同じ集団に属すると認識している者同士での戦闘行為は行なわれなかったということである。つまり、他者との紛争を解決するために、第三者の首を狩る競争が行なわれていたのである。

一方、ビスマーク諸島の西方に位置するパプアニューギニアの先住民族も激しい戦闘行為を繰り返していたことで知られている。吉田はメイ川流域に居住するイワム族とミアンミン族を例にとり、彼らの戦いの目的について、基本的には土地をめぐる争いであり、農耕地、石材の採石地、マラリアの猖獗地の回避といった生態学的要因が強く反映していると言及している（吉田, 1988 : 54-56）。一方で、楽しみ、略奪婚、復讐といった生態学的レベルとは異なる要因が戦いの背景にあった可能性も指摘しており（吉田, 1988 : 58-60）、これは、台湾原住民族が行っていた首狩りとも重なる部分である。戦闘行為によって相手を殺戮することは、外部からは「野蛮」というイメージでとらえられがちであるが、当事者にとっては勇猛さを表現する最良の手段であり、オーストロネシア系の諸集団にみられる戦いは敵にたいして、単に実利的な優位性を得るだけでなく、自らの社会における地位を獲得したり、競争にうちかつプロセスであったと考えることもできるであろう。

ところで、台湾原住民族とニューギニア、メラネシア諸地域の集団の戦闘行為で大きく異なるのが、カニバリズムの存在であろう。台湾原住民族について書かれてきた民族誌資料においてカニバリズムの存在が記述されたものは皆無であり、台湾原住民族は自ら首狩りの歴史は語ることはあるが、カニバリズムの存在には極めて否定的である。これに対し、ニューギニアやメラネシアの民族誌的記述ではカニバリズムが存在したことが明記されている。また、カニバリズムの存在を即物的に示す素材として、槍に装着された骨や仮面に埋め込まれた頭蓋骨などがあげられることも少なくなかつ

た。ブラウン自身もニューアイルランドで遭遇した先住民が手にする槍に装着された骨を人間の足や腕の骨であるとし、それらがカニバリズムの証拠であると考えている (Brown, G.1978 (1908) : 125)。ブラウンが目撃したものは実際に人骨であったのかもしれないが、少なくとも今回のコレクションの中に含まれていた骨には人骨だけでなく、他の動物の骨が含まれていたことは事実であり、槍に装着される骨は人骨でも他の動物の骨でもよかったのではないだろうかという疑問が生じることになる。すなわち、骨という死を連想させるものがもつ力に観察者が引きずられてきたのではという問いかけである。同様な問題については、ニューギニアで用いられていたマンキャッチャーのもつ虚像性に関するオハンロンの論考でも触れられている (O'Hanlon, 1997 : 132-134)。

ブラウンに限らず、先達が残した民族誌的記述のもつ価値は認める必要があるだろう。一方で、過去と現代をつなぐ鍵となるモノがあるならば、我々はモノの検証を科学的な手続きにしたがって行なうことによって、過去の社会を検証することが可能となるのも事実である。そうした意味において、ブラウンのコレクションは過去のオセアニア社会のありかたを検証するための文化遺産といってよいであろう。

注

1) 骨の標本資料の同定にあたっては、大阪市立自然史博物館の樽野博幸先生、和田岳先生にご協力、ご教示をいただいた。ただし、同定結果については著者にその責があることを記しておく。

文 献

Brown, G.

1978 (1908) *George Brown, D.D. Pioneer-Missionary and Explorer, An Autobiography*. New York : AMS Press. (reprinted from the edition of 1908, London, by Hodder and Stoughton)

O'Hanlon, M.

1997 Reinterrogating 'Man-Catchers : Western Images of the Pacific' In Kenji Yoshida and John Mack (eds) *Images of Other Cultures*, pp.132-134. Osaka : NHK Service Center.

関根久雄

- 1999 「ジョージ・ブラウン・コレクションの中のソロモン諸島」石森秀三・林 勲男編
『ジョージ・ブラウン・コレクションの研究』国立民族学博物館調査報告第10号,
大阪：国立民族学博物館。

台湾総督府警務局理蕃課

- 1993 『理蕃の友』創刊号。

吉田集而

- 1988 『不死身のナイティーニューギニア・イワム族の戦いと食人』東京：平凡社。